



地域建設に励んだ先人の足跡 明治初期・山形の石橋群



硯橋(のぞきばし)
山形県上山市榎下、1882(明治15)年架橋、橋幅3.5m、径間約8.4m
石材は大門石(凝灰岩)、上山市指定文化財 写真提供/中村まさあき

山形県に現存するめがね橋は12橋確認されている。九州・沖縄を除く都道府県だけを比較すると、この数は多いと言える。その背景には、山形県の初代県令(後の県知事)として、明治9〜15(1876〜82)年に在任した三島通庸(みしま・みちつね)の豪腕があったとされる。

三島は薩摩出身。戊辰戦争で新政府軍の補給部隊で活躍。明治4(1871)年に東京府参事、7年から酒田県令。9年に酒田・置賜(おいたま)・山形の3県が統合され、山形県令となった。トンネル掘削を含む大規模な道路開発、石橋架設、県庁舎を中心とした都市整備事業、地方郡役所の建築などを急ピッチに進め、三島には「土木県令」というあだ名がついた。

北は秋田、南は福島へ至る山形の幹線道路には、堅岩橋(かきわばし)、上山市川口、明治11年、中山橋(同市中山、同13年)、吉田橋(南陽市小岩沢、同13年)、小巖橋(こいわばし、同市小岩沢、同14年)などのめがね橋が架けられた。また、奥羽街道の難所であった金山峠に続く宿場町、榎下(ならげ)では、地域住民の要望を取り入れ、新橋(上山市榎下、同13年)と硯橋(のぞきばし)、

同市榎下、同15年)が架設された。

各橋の石材は凝灰岩で、特に輪石に大きな石材が使用されている点が共通している。昨年の豪雨で大きな被害を受けた小巖橋の修復工事を担当する、「尾上建設」(熊本・山都町)の尾上一哉・代表取締役(会員)は、「この地の凝灰岩は、溶結凝灰岩に比べ軽量でヒビが少なく、大きな素材に加工できる利点があります。山形には鹿兒島の石工が派遣されたといわれていますが、石橋の強度と凝灰岩の性質を考え、大きな輪石を使用したのではないかと解説する。

南陽市の赤湯温泉郷にある烏帽子(えぼし)山八幡宮には、高さ10.75mもの継ぎ目のない一本ものの柱石が使われた大鳥居、見事な狛犬(こまいぬ)や灯籠(とうろう)といった石造物が奉納されているが、これらは吉田橋にその名が残る石工、吉田善之助の仕事である。

各橋の架設年代は、日本が西洋列強諸国を追いかけるように近代国家を目指し、国際社会の荒波に乗りだした明治初期。現存する山形のめがね橋はその時代、地域建設に励んだ先人の存在を物語っている。(広報部)

※山形県HP「三島通庸と山形県」を参照

※2・3面に関連記事

中面の案内

2面 小巖橋修復工事=山形・南陽市=
6面 石橋を守るために(3)(軸丸英顕)

4面 第36回大会を福岡県八女市で開催
7面 I♡めがね橋(上塚尚孝)

小巖橋修復工事 Ⅱ 山形県南陽市 Ⅱ

現場で腕を振るう石工養成講座受講者

昨年の山形県豪雨災害により損傷した南陽市の「小巖橋」。その修復工事が今年5月から始まり、「肥後種山石工技術継承講座」受講者のうちの3人が現場で腕を振っている。工事の過程では、基礎石の下から「胴木」が見つかったことも注目される。現場の状況を紹介する。

写真提供／尾上建設(*a)、中村まさあき(*b)

石材の調達に苦勞

小巖橋(こいわばし)は、山形県南陽市小岩沢の前川支流の北川に架かる石造単アーチ橋。架橋は1881(明治14)年。径間は3.5m、橋長6.5mに対し、橋幅は6.7mもある。「蛇ヶ橋(蛇橋)」とも呼ばれ、「山形の石橋群」の一つとして、土木学会選奨土木遺産に指定されている。

昨年7月、南陽市は豪雨災害に見舞われ、小巖橋は右岸下流側の輪石や壁石、勾欄(こうらん)の一部が流失し、基礎も欠損するなどの被害を受けた。

同月、本会に修復に関する問い合わせ



工事中の小巖橋(下流側)。白っぽい輪石が新材(高畠石)。支保工は6点でジャッキアップされ、抜き差し用のレールが設置されている(*b)

があり、上塚尚孝・事務局長が石橋構築・修復技術者養成事業の世話役である「尾上建設」(同・山都町)の尾上一哉氏(会員)を紹介。尾上氏は「建設プロジェクトセンター」(熊本・大津町)代表取締役の中村秀樹氏(会員)を誘い、すぐに現地に飛んで被害調査を実施した。

小巖橋の修復工事の実施が決まり、今年5月から工事が始まったが、新しい石材の調達に困難が生じた。

「山形県内の凝灰岩の採石場は、全て稼働していなかったので、石材の在庫を探し求めた末、南陽市の隣の高畠町で偶然、高畠石(凝灰岩)を扱う佐藤石材店を見つけました」と尾上氏は振り返る。

幸運なことに石材提供先は見つかったが、店は佐藤孝義氏(83歳)が一人で運営されており、受注残の処理もあるため、調達に時間が掛かることになった。

復元工事の難しさ

小巖橋の修復工事には、2011年度に始まった「肥後種山石工技術継承講座」の受講者である、尾上建設社員の荒木大入氏と本田和幸氏、藤原石材(熊本・山都町)の藤原孝史氏(5月上旬から約1カ月間従事)の3人が加わり、他の尾上建設社員、元請け会社「三浦建設工業」(山形県南陽市)の社員とともに、現場で作業に取り組んだ。

支保工を設置して石橋を一度解体し、

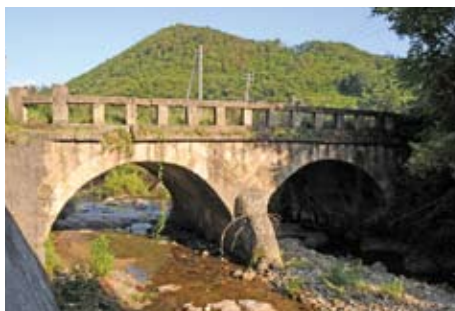


石材の位置確認のため、支保工の上に仮置きされた輪石(2015年8月9日)。旧材の輪石基底部の高さが水平にそろっていない(*a)



豪雨被害後の小巖橋(2014年7月)。下流側の輪石が崩れ、勾欄(こうらん)も流失している(*a)

山形の近代化を物語る貴重な土木文化遺産。1面で紹介した南陽市・上山市の石橋・石造物。写真提供／中村まさあき



堅磐橋。上山市川口、明治11年架橋、橋長14.3m、橋幅6.6m、上山市指定文化財



中山橋。上山市中山、明治13年架橋、橋長11.3m、橋幅6.7m、上山市指定文化財



吉田橋。南陽市小岩沢、明治13年架橋、橋長12.6m、橋幅7.2m、土木学会選奨土木遺産



新橋。上山市柵下、明治13年架橋、橋長14.7m、橋幅4.4m、径間約12m、上山市指定文化財



吉田橋にその名が残る石工、吉田善之助が彫刻した烏帽子(えぼし)山八幡宮(南陽市赤湯)の狛犬

その上で再度、石材の組み立てが行われた。石材(旧材)は、再使用できるものではないものが選別され、工事には新材(高畠石)が全体の3割に使用された。

修復工事について、荒木氏と本田氏は次のように振り返る。

「小巖橋の輪石は、各石材の形や大きさがまちまちで、輪石基底部の背の高さが水平にそろいませんでした。熊本で架けた実習橋のやり方そのままではなく、ここに合ったやり方を考え、慎重に作業を進める必要がありました」(荒木氏)。「旧材は削らない方針ですので、旧材に接する新材を絶妙に加工しなければなりません。旧材に囲まれている新材の場合、たった1つの輪石を加工するのに、1日掛かったことがあります」(本田氏)。

2氏の話からは、小巖橋を復元しよう

とする意気込みとともに、少しずつ提供される貴重な石材を、無駄にしないという思いも伝わってくる。

基礎石の下に胴木

小巖橋の解体過程では、左右両岸のアーチ基礎石の下から、松材の胴木が発見された。「1本の長めの木材とそれにつながる短い横木が少し残っていたことから、はしご状になっていた胴木が一部流失したのだと思います」と荒木氏。

はしご胴木は、肥後の野津石工、岩永三五郎が鹿児島藩に招かれ、現地の石工を指導して、1846(弘化3)年に築造した西田橋(鹿児島市)でも、移設保存の際に発見された。川床が軟弱な地盤に石造アーチ橋を架ける際の工夫と言える。

上塚事務局長は、はしご胴木の使用に



基礎石の下に松材の胴木を発見(*a)



胴木は2列のはしご状になっていたようだが、1列は流失したとみられ、短い横木が残っていた(*a)



残っていた胴木に松の新材をつなぎ、はしご状に組んで基礎石の下に設置(*a)

ついで、次のように述べる。

「軟弱な地盤は干拓地も同じ。鹿児島で石橋を架ける以前、岩永三五郎は八代海の干拓工事で石工棟梁を命じられ、現場で備前(岡山県と兵庫県の一部)の石工集団から、はしご胴木の使い方を学んだと考えられます。三島県令時代に架設された山形県の石橋で胴木が見つかった事実は、岩永三五郎が鹿児島に伝えた

技術が山形に伝わった可能性を示すものかもしれません」

新たな発見もあった小巖橋の修復工事。工事の予算執行期限は年度末であるが、冬は2月を越す積雪が当たり前の地域だけに、現場では、工事中の豪雨による再被災を最も恐れながら、9月末までの竣工を目指している。

(2015年8月9日・広報部)

福岡県八女市で第36回大会を開催

「ひふみよ橋」保存へ向け
地域住民が多数参加

写真提供／中村まことあき



洗玉橋(福岡県八女市上陽町、県指定文化財)では、地元の若者たちが結成した「和太鼓 童衆～WARABESHU～」の熱い演奏が披露された

第36回日本の石橋を守る大会が2015(平成27)年5月16・17日の2日間、福岡県八女市で開催された。総会の会場は八女市農業活性化センター(同上陽町)。大会には30人の個人会員に加え、「ひふみよ橋を守る会」(上陽町)や「院内石橋群景観保全協議会」(大分県宇佐市)の会員も団体会員として参加し、参加者は計78人となった。

活動報告

1日目の通常総会では、2012年の九州北部豪雨で被害を受けた、同市を流れる星野川に架かる「ひふみよ橋」(洗玉橋・寄口橋・大瀬橋・宮ヶ原橋)の保存・修復を目的に結成された「ひふみよ橋を守る会」の久間一正・会長を議長に選出し議事が進行。下の会則変更案が提出され、了承された。

第36回八女大会プログラム

【1日目(5月16日)】

開会宣言 末永暢雄・副会長
主催者挨拶 甲斐利幸・会長
来賓挨拶 北嶋藤孝・八女市

副市長

通常総会 議長 久間一正氏

活動報告 賛田岳和・中村秀

樹・尾上一哉・各氏

ひふみよ橋を守る会活動報告

講演会「上陽の石橋を守る」

講師 武末博伸氏 (株)建設技

術センター副社長

意見交換会(えびすや)

【2日目(5月17日)】

現地石橋見学会

案内役 馬場紘一氏 技術士

(建築)・郷土史家

通常総会の後は、昨年度の活動報告が行われた。賛

田岳和・資料整理部長は、石橋を発見した際のエピソードなどを披露。中村秀樹・

調査研究部長は、熊本県で行った石橋健全度調査について報告。尾上一哉・石橋構築・

修復技術者養成事業実行委員は、文化庁の補助を受けて今年3月、冊子「次世代

につなぐ石橋構築・修復技術」を発行したこと、事業が山形県の石橋修復へと展開していることなどを報告した。

ひふみよ橋を守る会の小

井手恒則氏は、豪雨から約

「ひふみよ橋を守る会」会員も大会に参加



大会会場の八女市農業活性化センター(上陽町)



総会で議長を務めた
久間一正氏

会則変更

第36回総会では、会則の変更が決議された。変更箇所とその理由について紹介する。

第2条

【変更後】事務所を、熊本県上益城郡山都町下市182番地2「通潤橋史料館内」に置く。

【変更前】事務所を、熊本県上益城郡山都町下市182番地2「通潤史料館内」に置く。

《変更理由》施設名称についての錯誤を修正するもの。



講演会で「石橋の子孫」と紹介された
臈(おぼろ)大橋(上陽町)



熊野宮参道橋(黒木町)



古須崎橋そばの廻水路(黒木町)



洪水に耐えた宮ヶ原橋(上陽町)

2カ月後に60人で会が発足し、活動を展開したことを紹介した。

講演会

を発表。現在、事業が進行中である。

同会は、ひふみよ橋の保存・修復、二次災害防止のため、各橋付近の流木やがれきの撤去等を八女市へ陳情。翌年6月には、ひふみよ橋や生駒野石切り場(上陽町)、市の伝統工芸である石灯笼(とうろう)工場等の見学イベント、東京大学名誉教授で土木設計家の篠原修氏を招いた講演会を開催している。

続いて、「上陽の石橋を守る」と題し、(株)建設技術セクター(福岡市博多区奈良屋町)の武末博伸・副社長の講演会が行われた。

上陽町の北部山間部に架けられた「臈(おぼろ)大橋」(全長293㍎、福岡県内最大規模のPCコンクリート製単一アーチ橋、篠原修設計が、実は「石橋の子孫」と

言える構造形式であり、ひふみよ橋が架かる「石橋の古里」にふさわしいデザインが追求されたことを紹介。臈大橋は、周辺環境と構造的合理性に優れ、地域に



講師の武末博伸氏

密着した極めて優秀な橋として2002年、土木学会・田中賞を受賞している。

講演で武末氏は、九州北部豪雨による、ひふみよ橋の被害状況を振り返り、石橋を現地に残し、どう守っていくかについて、河川改修計画の一部を紹介した。

現地石橋見学会

2日目は技術士(建築)・郷土史家の馬場紘一氏が案内する、現地石橋見学会が行われた。



案内役の馬場紘一氏

宿泊先のグリーンピア八女(黒木町)を出発し、古須崎橋、熊野宮参道橋ほか「字びの館」(旧隈本邸)を訪問。バスで移動中、馬場氏から、藩政期、柳川・久留米の両藩が存亡を賭けて築造した総延長24㍎に及ぶ農業用水路(廻水路)につ

いて、解説を聞いた。洗玉橋では、歓迎の和太鼓演奏が催され、一行は宮ヶ原橋の現状を確認し、寄口橋のそばの「ほたると石橋の館」で解散した。(広報部)

第7条

【変更後】 会費は毎年、定時総会の日までにその年度分を納入するものとする。

【変更前】 1 年度途中に入会した会員は、その年度の期首に入会したものとする。

2 年度途中で退会した会員は、その年度の期末に退会したものとする。

3 会費は毎年、定時総会の日までにそのその年度分を納入するものとする。

《変更理由》 年度途中の入退会者の年会費を減額しない旨の規定であるが、第8条の退会理由との不整合(死亡後も会員として取り扱う等)を解消するため、第2項および第3項を削除する。なお、途中入退会者の年会費の取り扱いも従前の通り、減額しないものとする。

第14条

【変更後】 …緊急事項は理事会において処理する。

【変更前】 …緊急事項は役員会において処理する。

第17条 (5) 【変更後】 その他理事会が必要と認めた事項。

【変更前】 その他役員会が必要と認めた事項。

《変更理由》 第14条第2項の「会議の種別」名称との整合のため。

第14条第3項 【変更後】 理事会は会長・副会長を含む理事で構成する。

【変更前】 理事会は会長・副会長および理事で構成する。

《変更理由》 第9条、第11条の役員規定(会長、副会長は理事ではない)との整合のため。

石橋を守るために(3)

会員 軸丸 英顕 (熊本県)

写真提供/軸丸英顕

前回、遊水地やダムなどで「水をゆつくり流す」方法を紹介しました。

今回は、石橋を迂回(うかい)する水路(バイパス)や川の流れ先を変える放水路を設ける方法を取り上げます。どちらも川の流れを「分ける」ことによって、石橋の下を流れる水量を減らす取り組みです。



写真1 中島川バイパストンネル(長崎市)
前方左右がバイパスの入口。後方2橋目が眼鏡橋

河川バイパスによる保存事例

昭和57年7月に長崎で大水害が発生しました。長崎市を流れる中島川に架かる石橋群は、6橋が流失し、国指

水を「分けて流して」守る

定重要文化財の「眼鏡橋」も大破する大きな被害を受けました。

災害後、中島川の川幅を広げることとなりましたが、多くの石橋保存の声を受けて、一部の区間については、川の左右両岸に河川バイ

パストンネル(写真1)が設けられました。これによって、眼鏡橋とその下流の「袋橋」は原形のまま復旧できることになりました。

なお、流出した石橋のうち4橋は、川の流れを阻害しないよう橋の形が改変され、石橋として再建されました。

河川バイパスの事例としては、熊本県荒尾市の関川に架かる「岩本橋」(写真2)もあります。昭和30年代に行われた関川の改修によ

り、橋の左岸側にバイパスが設けられました。工事により岩本橋は美しい姿のまま残り、周辺が公園化されて市民の憩いの場となっています。

写真3は、自然石を用いた親柱がと



写真3 吉田橋(山形・南陽市)
左岸側の河川バイパスが洪水時の影響を緩和



写真2 岩本橋(熊本・荒尾市)
左岸側に河川バイパスが整備され周辺は公園に

ても印象的な山形県南陽市の「吉田橋」です。ここでは左岸側にバイパスが造られており、それが洪水時の石橋への影響を緩和しています。

その他、今年の第36回大会で紹介さ



写真5 高瀬裏川放水路(熊本・玉名市)
余分な水を左側へ放水。正面がポンプ場



写真4 高瀬目鏡橋(熊本・玉名市)
上流の放水路整備により、現位置保存が可能に

放水路による保存事例

熊本県玉名市の高瀬裏川(たかせうらかわ)は、菊池川の支川で、この辺りはかつて、水運による物資の集散地でした。江戸時代に架けられた「高瀬目鏡橋」(写真4)や石造りの桁橋

群があり、水門の機能を併せ持つ秋丸目鏡橋も移設されています。近くには、船への米の積み込み利用された「俵ころがし」と呼ばれる古い石畳の坂も残っており、一帯は歴史的な「石」の文化を感じられる場所となっています。

高瀬裏川には、この地区の上流部に洪水を直接、菊池川に流すための放水路(写真5)が設けられています。排水樋門や強制的に排水するためのポンプ場も併設され、下流の水量を大幅に減らすことができています。これにより、高瀬目鏡橋などはそのままの形での保存が可能になりました。ここは現在、「高瀬裏川水際緑地」として公園化され、花しょうぶの名所で知られる観光地となっています。

次回は、時代の変化に伴って、石橋の機能と社会が求める機能とにズレが生じた場合の対応事例を紹介したいと思います。

橋の名称の変化と揺れ

熊本県のめがね橋の名称は、架設後に変化し、いくつかの呼び名があつて、揺れているものがある。

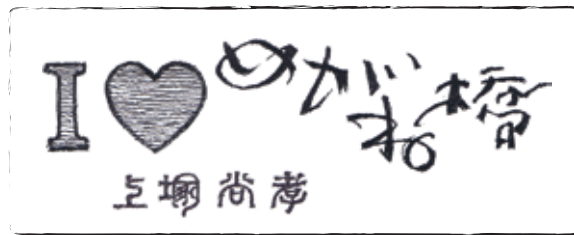
国指定重要文化財の霊台橋と通潤橋についてはどうか。霊台橋架設当時の工事日記を調べると当初、右岸側の地名を付けて「船津目鑑橋」だったけれど、地域住民が架設工事を手伝い、予定より早く橋が完成した。砥用(ともち)手永惣庄屋(そつじょうや)の篠原善兵衛(ささわら・ぜんべい)は、それが中国の古典「孟子」に登場する文王の時代の物見台(霊台)建設の話に類似していると気付き、霊台を橋の名に冠した。「聖の御代のうてな」の名に添へて此の橋の名をのけたい橋と名づけ」と記している。以降は「霊台橋」と呼ばれたが、それでも地元民は、右岸の地名(船津)にちなんで「ふなつばし」と呼んでいた。

通潤橋は、連通管方式の水路橋であることから、「吹上台(ふきあげだい)目鑑橋」と名付けられた。その後、奉行の真野源之助(まの・げんのすけ)は、中国の「易经」注釈書に記された「沢在、山下、其氣上通、潤及、草木百物」から「通」「潤」の二文字を選び「通潤橋」と命名。勤王の志士、宮部鼎蔵(みやべ・ていぞう)揮毫きごう)の石碑は見た人が多いはず。

石碑に橋名が彫つてあると、橋の名に

揺れが少ない。迫間川(菊池川水系)の「迫間橋」の石碑の文字は隈府(菊池市)の学者、城野静軒が揮毫。上流の「龍門(りゅうもん)橋」、その上流の「虎口(こく)橋」、龍門ダム上流の「鳳来(ほうぎ)橋」、各橋名が大書してある。村人が橋の名を呼ぶのに揺れはなからう。

吉田川(菊池川水系)に架かる2連ア



ーチ3基のうち、最上流の「熊入橋」の名は呼び名の揺れが少ない。下流の橋は「湯町川橋」と橋名が刻まれていたが、後に「湯町橋」へと変化している。

鉾ノ甲川(菊池川水系)の立門(たてかど)橋は、壁面に大きく「立門」と浮き彫りしてある。間違えようがないが、「りゅうもん」と読む人は少ないでしょうな。

山鹿市鹿北町を流れる岩野川に架かる「田中(たんなか)橋」は、石碑に「化蔵(けぞんこう)」と彫つてある。「缸」は石造アーチ橋を指すが、読みが難しく、なじまないのか、専ら「たんなかばし」と呼ばれている。そこから峠を越えた

同市菊鹿町山内には、「確蔵(かくぞんこう)」「萬蔵(ばんざいこう)」の二碑が残る。確蔵は現存しているが、難解文字が敬遠されたのか、「今村のめがね橋」と呼ばれている。内田小学校山内分校前にあつた萬蔵は、洪水で流失したので、コンクリート橋に架け替えられた。

熊本市中心街を流れる坪井川に架かる「明八橋」「明十橋」は、架設年(明治8年、10年)を冠し、橋名に揺れない。

緑川水系では、宇城市豊野町の橋名には変化が多い。丸山家文書に出てくる「下休目鑑橋」は「下安見のめがね橋」と表記されたが、それが小字にちなんで「下鶴橋」へ変化。古文書「町在」に「馬渡川目鑑橋」と記された橋は「山崎橋」、同じく「鬼迫川目鑑橋」は「三由(みつよせ)橋」と、現在は地名を冠している。

下益城郡美里町の「馬門(まかど)橋」は、古文書に「馬門川目鑑橋」と記されていることに関連しているようで、同じく「小庭村佐俣村懸二俣川目鑑橋」「小庭村佐俣村懸二俣福良渡目鑑橋」は、それぞれ「小庭二俣目鑑橋」「二俣福良渡目鑑橋」と表記している。このような名称決定は、教育委員会担当者の判断だろう。

同じ緑川支流で上益城郡御船町を流れる門前川に架かる「門前川目鑑橋」は、今春、県の文化財に指定された。「町在」を見ると、「西木倉村懸往還筋谷川」に架

けたという意味から「西木倉目鑑橋」と称していたが、行政により河川名が門前川と決められたことで橋名が変化した。

上益城郡山都町の笹原川(緑川水系)に架かる「聖橋」は、天保3年に八代(野津)の石工、岩永三五郎が架けたころは、「男成川目鑑橋」と呼ばれていた。その翌年、同町に架設された「下馬尾川目鑑橋」は現在、「浜町橋」と名を変えた。いつ、誰が名称変更したかは不明。

葦北郡芦北町には、「橋本眼鏡橋」と「橋本橋」があり、混同しやすい。ところが橋本橋の所在地は、どうやら橋ノ元らしい。町の社会教育課に「橋ノ元橋」が正しいのではないかと尋ねたが、名称決定時の担当者がすでに退職しているため、経緯不詳であった。橋の名称を決める際は、地名や由来を吟味してもらいたいものである。

人吉市を流れる球磨川の支流、鳩胸川に「柴笠(しばがさ)の眼鏡橋」が架かっているが、「柴笠の」の「の」は必要なのかと市役所に問い合わせたら、担当者が気の毒にも困惑されたことがある。天草市の「楠浦の眼鏡橋」も同様で、市の担当者は「要りません」と明言されたが、橋の案内表示には、「の」が付いている。

地名の下に付く「の」は、地域住民の慣用からの場合が専らで、あってもなくてもいいようだ。これも日本語の揺れ現象と言えよう。(2015年6月3日)

保存石材使い移築

「名里橋」―大分・日田市

大分県日田市の求来里(くくり)地区で、「石工の里」を目指したまちづくりを図ろうと、11年の時を経て、「名里橋」(なざとばし)の移築が今年3月に竣工した。同橋は地区の基盤整備事業に伴う河川改修と道路改良工事により、2004年に解体され、石材が保存されていた。

移築された場所は、コンクリート橋に架け替えられた現在の名里橋の1km近く下流の親水公園内(市道沿いの石碑「求来里地区圃場整備事業竣工記念碑」近く)。石橋はペイントされたコンクリ



石原 史彦「大窪橋」
熊本県下益城郡美里町

石橋のふる風

もう40年ほど前の微かな記憶。バスから見えた、丸いアーチの石橋。小ぢんまりとしたその姿を確かめたのは、それから30年も過ぎてから。熊本本の石橋を紹介する本の表紙にも出ている大窪橋である。春は桜の咲く3月末、橋は評判通りの美しさで満たされていた。
数年前に鉛筆だけで描いてみたが、もう一度描きたく

ートの護岸に取り付けられ、路面もコンクリート、金属製の欄干が使用されている。移築された名里橋は、現代の土木工法を併用して施工されたようだ。

石材(旧材)の表には番号が書かれて

いるが、要石の両側の薄い輪石の列には番号がないことから、そこに新材が使用されたことが分かる。元のアーチの形状に復元しようとしたが、何らかの誤差が生じたのかもしれない。解体時に元の石橋の形状を測量し、正確に記録



移築された名里橋(大分・日田市求来里)
写真上は上流側。下は下流側。用水路の水がアーチ下を流れ、求来里川に注いでいる

されていたか不明であるが、そこには復元の難しさが現れている。
親水公園にはもう1橋、保存石材を使った石橋の移築が計画されていると、地元紙などは報じている。(広報部)

なつたのが2年前。2度も描きたくなるほどの石橋なのである。それほど魅力の詰まった石橋の一つが、大窪橋。
2度目は画材を鉛筆からサインペンに変えた。濃淡をつけるのに苦労したが、ペンを倒し気味にすることで何とか表現することができたような気がする。
きつと昔から、地区の住民に愛されてきたに違いない。描き上げてそう思った。(2013年作品、サインペン画、文||石原史彦)

速報

第37回大会は、2016年5月14・15日
大分県宇佐市院内町で開催が決定

編集後記

東北・山形県の小巖橋修復工事現場の気温計で8月2日は42度を記録したそうです。冬は2尺の雪が積もる場所とは思えない猛暑。それでも工事は着々と進められていました。安全を第一に、立派に仕上げてもらいたいと思います。

今回号では、紹介できなかったことが2つありました。1つは、熊本の中村幸史郎会員の日本土木学会(今年6月、熊本大学で開催)での「石造めがね橋のアーチ設計に関する研究」と題した発表。その内容については、次号で紹介する予定です。2つ目は熊本・天草市の楠浦眼鏡橋の修復工事。こちらの工事は来年度も続くため、次号以降で紹介します。

(会報担当 中村まさあき)

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報87号(通算) 2015(平成27)年9月8日発行

代表者 会長 甲斐 利幸

事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2

通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360

HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>

BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>